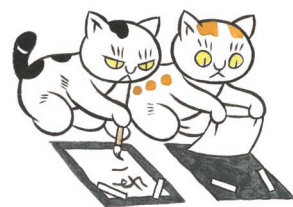




滋賀大学教授
中村史朗

高学年の指導と 中学校への接続

前回は、小学校書写指導の導入期についてお伝えしました。今回は、高学年での学習の積み重ねから、中学校への接続を意識した指導について考えます。



中村史朗
1960年京都府生まれ。専門は書学書道史。漢字を中心とする書家としても活躍。光村図書 中学校『書写』および高等学校『書』教科書編集委員。

再学習の大切さ



小学校における表記は楷書が前提となっており、楷書の書法に習熟することが書写学習の中心であることは前回までに確認したとおりです。今日の公的書体は楷書なので、まずは社会的規範を身につけることを意図しているのです。

小学校六年間の書写教育の内容を実習の観点から整理すると、前学年までの内容を再学習しながら積み上げていく姿になっていることがわかります。

例えば小学校三年生から毛筆の学習が始まりますが、三年生では「横画」から「曲がり」まで、九つの基本点画を学び、四年生では、基本点画の筆遣いを確認します。三・四年生が全ての基



令和2年度版5年「六年生を送る会に向けて」

教科横断的に、またあらゆる生活場面に生かすことを意識して、書写の指導は行われるべきものです。書法をことさらに意識しなくても、身体が反応するように書く行為が進むことが理想でしょう。

「点画の連続」

行書の学びを視野に入れて



高学年は、小学校のまとめの時期である

本点画について、穂先の動きに注意しながら正確に書きこなすことは容易ではありません。また教師からの言葉による説明がどの程度届いているのかも個人差が大きいと思われます。しながら、上の学年でそのことを再学習すると、教師の説明も把握しやすく前回できなかったことを克服できることも少なくありません。筆者は、毛筆による「右はらい」などは、小学校では何年にもわたって取り組むことが求められているものだと考えています。高学年で基礎的事項の反復に取り組むことの重要性は再確認される必要があるのではないのでしょうか。

あらゆる場面に生きる「書写力」



時に、中学校での学習を意識して学びを深めていく時期でもあります。両者に共通する指導事項も少なくないのですが、中学校における新しい事柄として特筆すべきはやはり行書の学習でしょう。

行書は、現代社会における実用書体で、楷書の補助的な役割を果たしています。それは生活上の利便性を追求する中で成熟してきたものです。行書は、丁寧にゆっくり書いても、楷書より数段速く書くことができます。楷書と比べて、点画が連続したり、省略されたりすることがある、ということも深く関係していますが、運筆動作そのものが楷書より動的で、点画間のなめらかな連絡動作こそがこの書体の重要な特質であるからです。

高学年の「毛筆を使用して穂先の動きと点画のつながりを意識して書く」ということは、中学校における行書の学習を視野に入れた記述と見ることができます。ただし、楷書で書く場合は把握しづらい面があるでしょう。実際に書くときに、空間でどのような筆路が生じているのか、繰り返し書きながら確認する必要があります。楷書の原則を守りながら、文字の集団をひ

高学年の指導においては、基礎的事項の反復に加え、「活用」ということが眼目となります。学習指導要領にも、「用紙全体との関係に注意して」「書く早さを意識して」「目的に応じて筆記具を選び」といった応用を意識した語句が並びます。楷書によって自然に漢字と仮名を調和させて書けるようになると、あらゆる生活場面にその力を展開することができるようになります。高学年になると教科書にも応用的な範例が多く示されるようになります。それらを活用しながら、あらゆる書式を経験して、生活場面を想定した学習を多く取り入れたいものです。実際の場面を想定し、課題を具体化しながら書くことが有効な学習と言えるでしょう。書写の指導が書写の時間だけで完結してしまっている意味がありません。



令和2年度版6年「点画のつながりと読みやすさ」

行書は、運動のなかで文字の姿が定まってくる書体なので、書き手の身体動作の特性が楷書より点画に反映されやすいものです。私の筆跡は行書において最も作られやすいものと言いうことができるでしょう。新たな学びの楽しみが中学校で待っています。